

IOM（国際移住機関） イラク国内避難民に関する報告

DTMレポート: Displacement Tracking Matrix(第4版)

2014年6-7月(8月4日現在)

2014年9月7日
翻訳: JVC イラクチーム

総括

このレポートで使われている数字はすべて、2014年に入ってからIOMが確認した176,410の国内避難民世帯を対象にした「ステージ1+」のDTM統計の親データに基づくものです。そのほか特に記載があるデータは、6月から7月にかけてより詳細に行われた現地調査によるデータに基づいています。また一部のデータは、8月7日に現地の情報提供者より得たものを使用しています。



避難民の動向

2014年1月以降、**176,150世帯**が家を追われました。
イラク全体で、**1,381**の地区が避難民を受け入れています。
アンバール県には、**5万世帯以上**の避難民がいます。
避難民の**28%**はクルド自治区に避難しています。



避難民の住宅状況

避難世帯の**35%**は、親戚の下に身を寄せています。
避難世帯の**26%**は、貸家住まいです。
避難世帯の**23%**は、不安定な居住地で生活しています。
避難世帯の**10%**は、ホテルやモーテルで生活しています。



日用品

避難民世帯の**77%**で、日用品が不足しています。
調査された居住区のうち**90%**において、最も不足している物資は毛布です。



食料

避難世帯のうち**61%**は、十分な食料を得ることができません。
調査対象の居住区のうち**65%**で、主食である小麦粉を入手できない避難民が確認されています。
調査対象の居住区のうち**88%**で、避難民は質素な食事を強いられています。



水と衛生

避難世帯の**26%**は、十分な飲料水を手に入れることができません。
調査対象の居住区の避難世帯のうち**33%**は、飲料水以外の生活用水が不足しています。
調査対象の居住区の避難世帯のうち**28%**は、住居内にトイレがありません。



保健

避難民世帯の**23%**が、医療施設を十分に利用することができません。
調査対象の居住区の避難民世帯のうち**54%**が利用する保健所は、適切な医療用品がありません。



避難民の保護

調査対象の居住区において、**39,894人**が保護の必要な状況にあります。
13,236人の子どもたちが、拷問や誘拐、強制労働などの暴力的事件の被害者であるか、またはそのリスクがあります。
調査対象の居住区の避難民のうち**14%**が、5歳以下の子どもたちです。



ニーズ

130,941の避難世帯で、日用品が不足しています。
112,946の避難世帯が、食料を緊急に必要としています。そのうち過半数は、アンバール県内に避難している世帯です。
36,201の避難世帯（ほぼすべてがアンバール県内に避難）は、食料、飲料水、保健施設が不足しています。

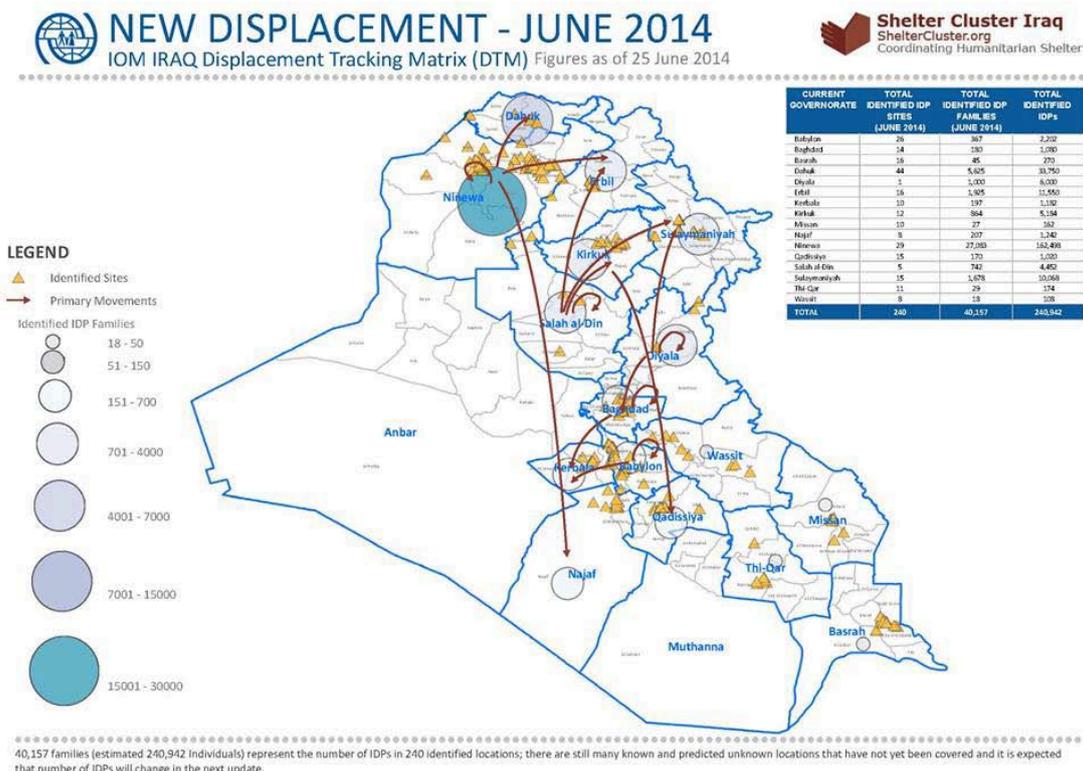
調査背景

DTMとは、避難民の数や避難先の状況に関する基礎的な情報を収集するため、IOMが開発した情報管理ツールです。DTMは、ハイチ、パキスタン、マリ、フィリピン、南スーダンなど、30 過酷以上で調査を展開しています。イラクでは 2006 年、宗派对立による国内避難民の動きを調査するために導入されました。

2014 年の DTM 調査が始まってから 3 か月 (5 月末まで) の間に、IOM は合計 840 の居住区の、79,810 の避難民世帯を確認しました。その多くがアンバール県在住で、アンバール県内だけで 222 の地区に 52,697 の避難民世帯が確認されました。6 月初め、反政府勢力がモスルを制圧し、バグダードやモスル周辺に向け進軍するという事態となり、情勢は急激に悪化しました。6 月から 7 月にかけて、ニナワ県及びサラヘディン県から大量の避難民が流出しました。DTM ラウンド4の結果と 8 月 7 日までの調査を総合すると、現在も続いている危機により、今年に入ってから全体で 176,150 の家族が避難を余儀なくされていることを確認しました。

ニナワ県北部のシンジャルやハムダニヤで直近に発生した武力衝突により、多くの家族が避難していると思われませんが、総数を把握することが困難なので、避難家族の総数に関しては、この調査結果より多くなることは間違いありません。(UNOCHA は、8 月 3 日以降 195,000 人の避難民が発生しているの見積もっています)。

この報告書は、2014 年の 6 月から 7 月にかけて、5 月までの避難民受け入れ地区と 6 月以後の避難民受け入れ地区の両方を対象に行われた、DTM ラウンド4に基づくものです。



2014年の避難状況概観

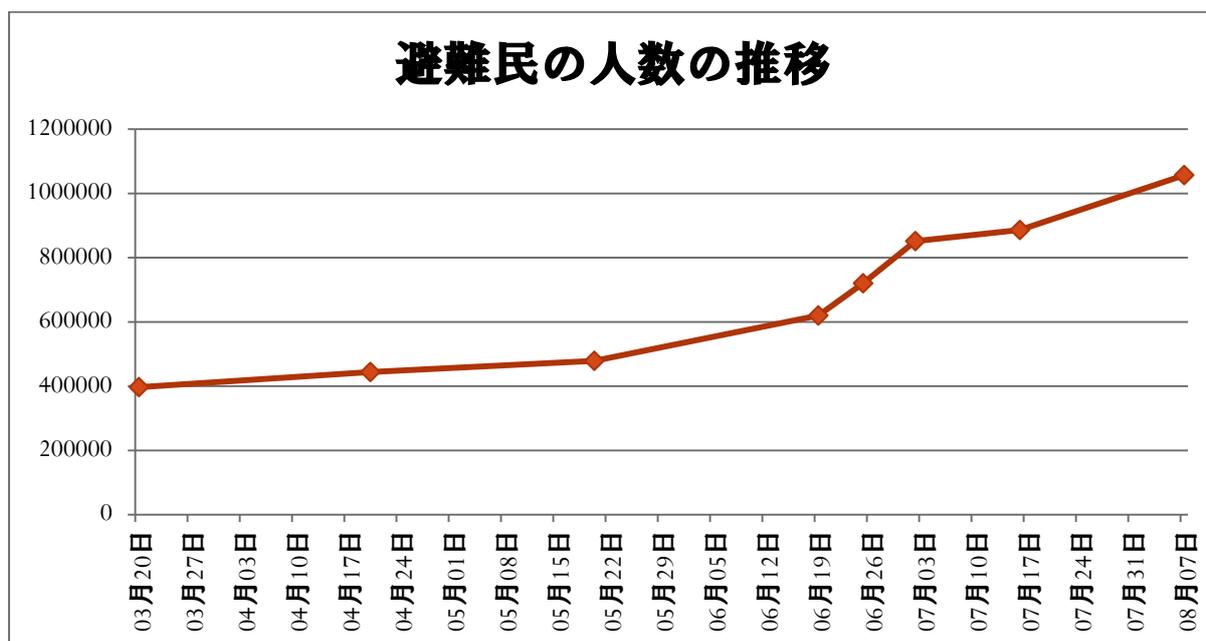
2013年12月下半期、アンバール県で情勢が悪化し、イラク治安軍と武装勢力の武力衝突により、国内避難民が大量に発生しました。情勢は悪化の一途を辿っています。避難民流出のピークは2014年の1月から2月にかけてでしたが、今も紛争が続いているため、流出は続いています。多くの避難家族はアンバール県内で避難生活を送っていますが、隣接する県やクルド自治区に避難した人々も多くいます。IOMは、およそ50万人がアンバール県から県外へ避難したと確認しました(2014年5月現在)。

武装勢力と政府軍の戦闘が続く中、6月初頭、武装勢力はアンバール県外部へ一気に侵攻し、まずニナワ県北部のモスル市へ侵攻しました。モスルが陥落すると、武装勢力は首都を目指して急速な勢いで南進し、サラハッディーン県、キルクーク県、ディヤーラー県へ侵攻しました。その結果、さらなる避難民が発生すると同時に、深刻な人道上の危機が発生しました。イラク中央部と北部の県を戦火が飲み込みました。もともとアンバール県から避難していた人々が2度目の避難を強いられたケースもあり、アンバール県や他の県から多くの家族が北のクルド自治区へ避難しました。

上記を受けてIOMは、イラクにおける最近の紛争による避難民を、2014年5月までに避難した人々(主にアンバール県から流出)と、同年6月以降に避難した人々(ニナワ県、サラハッディーン県、キルクーク県、ディヤーラー県などイラク北部および中央部の県から流出)の2種類に分類しています。

過去7か月にわたり続く戦闘により、国全体で100万人以上のイラク人が避難を余儀なくされました。IOMは、現在イラク全体で176,150の避難世帯が1,381の居住区に身を寄せていることを確認することができます。

現在の状況は、2006年から2008年間の危機的状況(サマラのモスクが爆破されたことを契機に、160万人の国内避難民が発生した)以降、最悪の状況であると考えられます。



避難民の動向

● 5月以前の避難民

今年初めにイラクで紛争が始まって以降、IOMは避難民の受け入れ地区の調査を続けており、6月初頭にモスルが占拠される以前の時点で81,553の避難世帯を確認しています。避難先の内訳は、アンバール県が66% (54,091世帯)を占め、次いでバグダッド県が9,433世帯、スレイマニヤ県が5,104世帯、サラハッディーン県が4,555世帯となっており、アンバール県に集中していることがわかります。

ほとんどの避難家族は、戦闘が集中していたアンバール県のラマーディーやファルージャから避難してきています。一方、5月の時点でバービル県、バグダッド県、ディヤーラー県、キルクーク県、ニナワ県から、合わせて800以上の避難民世帯が避難していたことも確認されています。

● 6月以降の避難民

IOMは、武装勢力がイラク北部のモスルを制圧して以降、ほぼ10万世帯、人数にしてちょうど50万人が避難民となったことを確認しました。8月3日に、武装勢力がニナワ県の少数民族に対し大規模な攻撃を開始したこともあいまって、ここ3週間の間にイラクでは避難民がさらに大幅に増える結果となりました。

この3週間で、28,474世帯が新たに避難したことが確認され、人数で言うと171,000人に上ると見積もられています。この間に、ニナワ県(多数の避難民が流出している県)を除くすべての県、特にドホーク県とキルクーク県で、避難民の数が増加しました。また、二次避難(訳注・避難先からさらにまた避難すること)も多く発生しています。

避難民はイラク国内の様々な県に避難していますが、突出して多くの避難民が押し寄せている県があります。ドホーク県は、武装勢力が8月3日にシンジャルに侵攻を開始したことに伴う避難民を、とりわけ多く受け入れています。IOMは、この何週間かで12,526世帯がニナワ県からドホーク県に避難したことを確認しました。そのうち11,200世帯は、Sumel地区に避難してきたヤジディ教徒です。この地区では、避難民が急速かつ大規模に増加しており、現在ではイラク全土で最も多く、6月以降に避難してきた避難民を抱える地区となっています。

直近のヤジディ教徒の避難に加え、IOMは他の少数民族が避難している地区を確認しました。13,000人以上のシーア派トルクメン人が、2014年に発生した紛争のため主にニナワ県のタッル・アフアルやシンジャルから、カルバラー県やナジャフ県といったイラク中南部のシーア派が多数を占める県へと避難してきています。ここ3週間で、6,000人以上のシーア派トルクメン人が、カルバラーやナジャフへ避難しました。

サラハッディーン県からの避難民の数も増えており、先週だけで約7,000世帯が新たに避難しました。このうち1,000世帯以上が親戚を頼ってアンバール県に避難しましたが、6,000世帯以上はキルクーク県に避難しました。武装勢力がモスルを制圧し、バグダッドを目指して南下したため、6月初頭

から累計で 34,000 世帯以上の避難民がサラハッディーン県から避難しました。エルビル県とキルクーク県は、合計 22,000 世帯以上の避難民を受け入れています。エルビル県のシャクラーワ地区が、サラハッディーン県からの避難民をもっとも多く受け入れており(6,820 世帯)、次いで首都エルビルが 6,130 世帯、キルクーク県は 5,261 世帯を受け入れています。注目すべきは、残りの 10,000 世帯が、サラハッディーン県内およびスレイマニヤ県に身を寄せていることです。

まとめると、2014 年 6 月から 8 月の間に、エルビル県、ドホーク県、ニネワ県、キルクーク県はそれぞれ、1 万世帯以上の避難民を受け入れていることとなります。

危機的状況が長引き、日々戦闘が起こっていることから、79%の避難民が日常的な戦闘や武力衝突から逃れるために避難することを決意したということです。一方、19%の避難民は他の理由から避難を決意していますが、多くの場合、民族的・宗派的な理由により迫害を受けたことが避難の動機になっています。2014 年に入って 100 万人の避難民が発生したことが確認されていますが、その最大の理由は明らかに、治安状況が安定しないことです。

2014 年に避難した人々は、今回の危機が始まって以来ずっと、もともと住んでいた場所に帰りたいたいという思いを持ち続けています。ラウンド4の DTM 調査で対象となったすべての居住区において、72%の避難民がもともと住んでいた場所に戻りたいと回答しており、15%が避難先に定住したいと回答、13%はまだ分からないと回答しています。わからないと回答した人の多くは、サラハッディーン県からエルビル県のシャクラーワ地区に避難している世帯と、ニナワ県からナジャフ県のナジャフ地区に避難している世帯です。避難先への定住を考えていると回答した世帯はほとんどすべて、7 月にニナワ県からナジャフ県のひとつの地区に避難してきたシーア派トルクメン人の世帯でした。

●イラク危機の推移

2013 年	12 月 31 日	イラク軍、アンバール県の、スンニ派武装集団(ISIS)の本拠地と見られるキャンプを襲撃。イラク軍と ISIS の戦闘が始まる。
2014 年	4 月 27 日	バグダッド県内のアブグレイブで大洪水が発生し、数千人が避難
	4 月 30 日	イラク国民議会選挙
	6 月 11 日	ISIS、イラク第二の都市であるモスルを制圧。さらに南進し、サラフッディーン県の県都であるティクリートを制圧。
	6 月 23 日	ISIS、国内最大規模の製油所があるバイジ(サラフッディーン県)を制圧
	8 月 3 日	ISIS の攻撃により、シンジャル地区に住んでいた数万人のヤジディ教徒が家を追われる
	8 月 11 日	マリキ首相退陣、ハイダル・アバディ氏が新首相に任命される
	8 月～	ISIS がクルド自治区に侵攻、多くの避難民が発生(特にキリスト教徒)—IOM が現在調査中
	8 月後半	米、対 ISIS 作戦開始(空爆など)・対 ISIS 有志同盟を結成

※本レポートは抜粋版です。全訳は後ほど、JVC ホームページに掲載予定です。2ページの図は、IOM の Facebook ページより抜粋。 <https://www.facebook.com/globalDTM?fref=photo> 6 月 26 日。3ページのグラフ、5ページの年表に関しては、原文を元に訳者が作成。